

南八幡遺跡2

— 南八幡遺跡群第4次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第277集

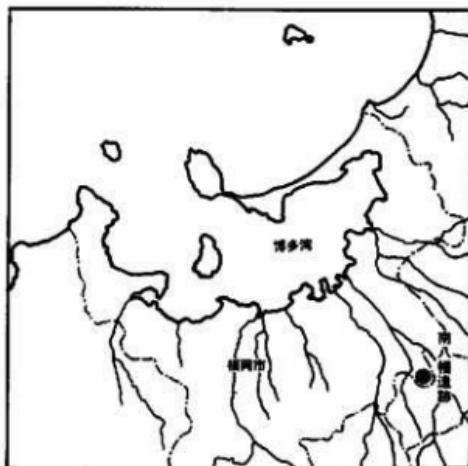
1992

福岡市教育委員会

南八幡遺跡2

— 南八幡遺跡群第4次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第277集



1992

福岡市教育委員会

遺跡調査番号	9112	遺跡略号	MHM4
調査地地番	博多区寿町2丁目86番-1・2	分布地図番号	麦野12
開発面積	670.04m ²	調査対象面積	205m ²
調査期間	1991年5月23日～6月15日		

序

福岡平野を北流する御笠川と那珂川に挟まれた地域は、わが国で最初に稻作農耕を受容した板付遺跡をはじめ、多くの遺跡が集中的に分布している地域です。一方では、福岡市中心部の南郊に位置する住宅地として、福岡市の成長に伴なって開発されてきた地域でもあります。

こうして、比較的早くから宅地化された福岡市博多区友野一帯も、最近では建て替えや再開発の時期を迎え、これに際して未調査のまま住宅の下に埋もれていた遺跡を調査する機会も増えてきました。

本書は、マンション建設に先立って発掘調査を行った南八幡遺跡群第4次調査の報告書です。本調査では、掘立柱建物跡を土とした多くの遺構を検出し、古代から中世にかかる集落の一部が姿を表わしました。

本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

発掘調査から資料整理までの費用負担・便宜にご協力をいただいた、上原俊幸氏を始めとする多くの方々に対し、心から謝意を表します。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

例 言・凡 例

1. 本書は、マンション建設に先立ち、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、福岡市博多区寿町2丁目86番1・2に関する発掘調査報告書である。
2. 本書の編集・執筆は、大庭康時が行なった。
3. 本書に使用した遺構実測図は、大庭および大庭智子が作成した。製図には、大庭があたった。なお、これらの実測図中で用いられている方位は、磁北である。
4. 本書に使用した遺構写真は、大庭が撮影した。
5. 本調査に関する記録の整理には、生垣綾子・国武真理子・瀬戸満寿江・古谷宏子・保利みや子があたった。
6. 本調査に関するすべての記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵管理される予定である。

本文目次

第一章	はじめに	1
1.	発掘調査にいたるまで	1
2.	発掘調査の組織と構成	1
3.	遺跡の立地と歴史的環境	2
	(1) 地形	2
	(2) 周辺の遺跡	2
	(3) 南八幡遺跡群の調査	4
	(4) 第4次調査地点の現況	6
第二章	発掘調査の記録	7
1.	発掘調査の概要と経過	7
2.	遺構	11
	(1) 壁穴住居状遺構	11
	1号壁穴住居状遺構	11
	2号壁穴住居状遺構	12
	3号壁穴住居状遺構	12
	(2) 掘立柱建物跡	13
	1号掘立柱建物跡	13
	2号掘立柱建物跡	13
	3号掘立柱建物跡	13
	4号掘立柱建物跡	13
	5号掘立柱建物跡	13
	6号掘立柱建物跡	13
	7号掘立柱建物跡	13
	8号掘立柱建物跡	16
	9号掘立柱建物跡	16
	10号掘立柱建物跡	18
	11号掘立柱建物跡	18
	12号掘立柱建物跡	19
	13号掘立柱建物跡	19
第三章	まとめ	20

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

1990年10月22日、上原俊幸氏より株式会社正協社を通じて、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区寿町2丁目86番1・2における埋蔵文化財事前審査願が提出された。同地は、福岡市中心部の南郊に位置し、従来住宅地として開発されてきた地域である。また、旧国鉄のJR南福岡駅に近接する交通至便の地で、再開発により高層マンションが建てられつつある地域でもある。今回提出された開発計画も、8階建のワンルームマンションを建設し、主として学生を対象に賃貸するというものであった。

申請地の周辺は、福岡市教育委員会が昭和56年に作成発行した『福岡市文化財分布地図（東部Ⅰ）』によって周知された南八幡遺跡群に含まれる。また、同遺跡内では、過去3回発掘調査がなされ、部分的に埋蔵文化財の遺存が確認してきた。よって、埋蔵文化財課では1990年11月8日試掘調査を実施し、文化財の有無を調査した。その結果、申請地の東約3分の1程の部分に遺構がみられ、西側は大きく削平されていることが明らかとなった。さらに、1991年4月16日既存家屋の解体を待つて再び試掘調査を行ない、遺構の遺存箇所を確定し、開発者との具体的な協議にはいった。埋蔵文化財課は、文化財の遺存面積が限られていることから設計変更を申し入れたが、結局設計変更是不可能であるとのことで、発掘調査を実施し記録保存をはかることになった。こうして、学生対象の賃貸マンションという利用目的からくる工期の期限ギリギリである1991年5月23日、発掘調査に着手することとなった。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託 上原俊幸

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉

調査総括 埋蔵文化財課課長 折尾 学

同 第2係長 塚星勝利

調査庶務 同 第1係 吉田麻由美

調査担当 同 第2係 大庭康時

調査作業 江越初代 大庭智子 金澤春雄 金子國雄 権藤利雄 関加代子 関義種

曾根崎昭子 村崎祐子 山崎光一 萩尾朱美

その他、発掘調査に関する種々の条件整備、調査中の便宜については、上原俊幸氏、株式会社正協社、株式会社大楠住宅産業の御協力をいただいた。

3. 遺跡の立地と歴史的環境

(1) 地形

南八幡遺跡群は、御笠川・那珂川によって形成された沖積平野である福岡平野の、南東部に位置している。福岡平野一帯は、現在は市街地化が進んで一見平坦な地形を示すが、各所に低丘陵が残存している。南八幡遺跡群は、御笠川左岸に手を括げた様な形で残る低丘陵上の一一本の指にあたる。この丘陵は、中位段丘面であり、約7万年前の阿蘇火山のカルデラ形成期に噴出した火砕流（阿蘇IV火砕流）によって形成された面である。火砕流による堆積物は、大部分は白色粘土化した八女粘土層であり、その直上には黄褐色軽石質火山灰（鳥栖ローム層）がおおっている。南八幡遺跡群では、鳥栖ローム層が遺構検出の際の、いわゆる地山にあたる。

なお、後述するが、第1次調査地点では地山が大きく削られ、本来の地形をとどめていない。この削平を受ける前の昭和10年代頃の地図によると、南八幡遺跡群の乗る中位段丘面が西に向って落ちて行く傾斜面もしくは落ち際に近くに位置するものとみられる。

(2) 周辺の遺跡

御笠川と那珂川にはさまれた、福岡平野のこの地域に人間の営みがみとめられるのは、旧石器時代にさかのぼる。諸岡B遺跡・井尻B遺跡では、ナイフ形石器の遺跡が調査されている。ナイフ形石器自体は、低丘陵上の他の遺跡でも採集されており、今後遺跡数が増える可能性は高い。

縄文時代晩期、この地域は我が国で最も早く稻作農耕を受容した地域である。国指定史跡でもある板付遺跡は、夜臼式土器の時期にすでに水路を引き灌漑を行なう水田を經營していた。南八幡遺跡群のすぐ北に位置する三筑遺跡でも、初期水田が調査されている。

弥生時代、ここはいわゆる「奴国」の中心地域となる。南八幡遺跡群の西南一帯には、須玖丘陵上に須玖岡本遺跡を代表とする遺跡群が展開している。最近の調査では、須玖水田遺跡・須玖唐梨遺跡・赤井手遺跡など、青銅器・鉄器の製造遺跡がみつかっており、金属器の生産・加工をも含めた総合的な遺跡群の姿が浮び上りつつある。なお、弥生時代の遺構は、井尻遺跡・諸岡遺跡・板付遺跡・仲島遺跡など、点在する低丘陵のほとんどで調査されている。

古墳時代においても、この地域の優位は持続され、三角縁神獸鏡を副葬した那珂八幡古墳をはじめ、前方後円墳が編年的に分布している。

奈良時代には、本調査地点から北に約1.8km離れて、高畠廃寺が建立されている。また、井相田C遺跡では、掘立柱建物を主とした集落が営まれていた。井相田C遺跡や、それに隣接する仲島遺跡では人面墨書き土器などが出土しており、掘立柱建物を主とするという建物の構成を含めて、遺跡の性格が問題となろう。奈良時代の集落としては、南八幡遺跡群・麦野A遺跡群・



Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 南八幡遺跡群
2. 同第4次調査地点
3. 麦野A遺跡群
4. 麦野B遺跡群
5. 麦野C遺跡群
6. 三筑遺跡
7. 井和田遺跡
8. 仲島遺跡
9. 高瀬庵寺
10. 板付遺跡
11. 諸間A遺跡群
12. 諸間B遺跡群
13. 井尻B遺跡群
14. 曰竹原遺跡
15. 須玖庄製遺跡
16. 須玖水田遺跡
17. 須玖同本遺跡
18. 同本遺跡
19. 赤井手遺跡
20. 伯安社遺跡
21. 原町遺跡

麦野C遺跡群などで堅穴住居跡群が調査されており、大規模な集落が存在した可能性が考えられる。

中世の遺構は、比較的よく見られるものであるが、残念ながら点的な調査にとどまり、集落の構造などにせまりうる調査例には乏しい。その中で、諸岡B遺跡では、土塁に開まれた15世紀の居館址が調査されており、村落に基盤をおいた武士の館と考えられている。

(3) 南八幡遺跡群の調査

南八幡遺跡群では、これまでに3次にわたる発掘調査と7回の試掘調査が行なわれ、今回の調査は第4次発掘調査にある。第4次発掘調査を報告するにあたって、これら既往の調査の成果について、略述しておく。

試掘調査

福岡市教育委員会埋蔵文化財課に届け出のあった開発計画の内、遺跡群の推定範囲に含まれるもの、立地等から遺跡の存在が予想されるものについては、試掘調査を実施している。その結果をうけて、発掘調査の必要の有無を判断することとなる。南八幡遺跡群では、発掘調査に

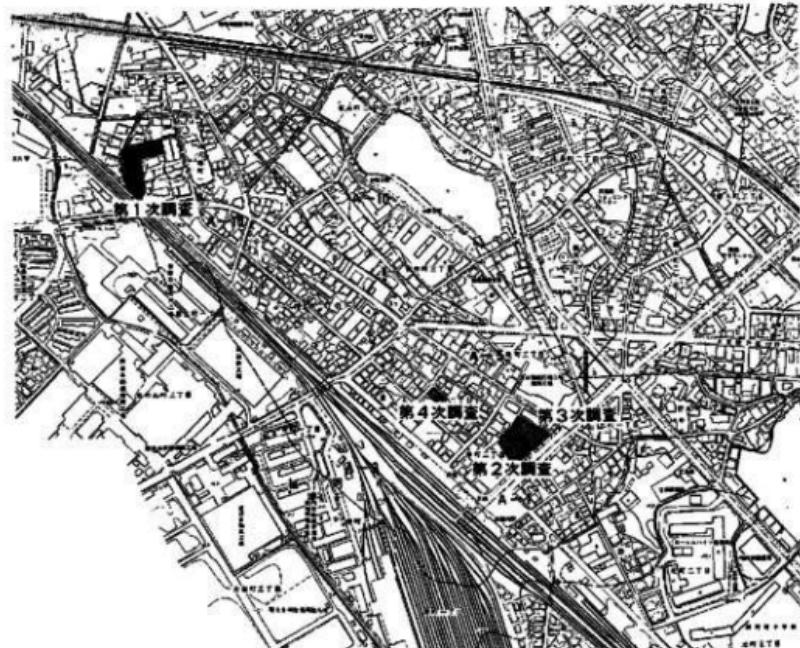


Fig. 2 第1～第4次調査地点位置図 (1/8,000)

いたったのは4件のみであり、他の試掘調査では遺構は検出されなかった。すなわち、南八幡遺跡群の立地する丘陵では、頂部付近を中心にかなり大きな削平がなされており、遺跡の推定範囲の大部分において既に遺構が失なわれている。遺構が残っているのは、丘陵縁辺部の傾斜面近くに限られることが明らかになってきたのである。

第1次調査（南八幡2丁目8-5、1979年10月12日～11月10日）

南八幡遺跡群の北端でなされた調査である。遺構の遺存状況は悪く、680m²の調査で古墳時代の溝1条が検出されたにとどまる。（本報告）

第2次調査（寿町2丁目119-1、1984年10月17日～12月15日）

南八幡遺跡群の推定範囲は、ここからさらに南につづくが、調査で検出された旧地形は、本



福岡市埋蔵文化財調査報告書第161号「南八幡遺跡」1988年付調査より再トレース・加筆

Fig. 3 第2・3次調査遺構分布図 (1/400)

調査地点から南に落ち込んでおり、南八幡遺跡群の南限もこの付近に求めるべきであろう。遺構の遺存状況は良好で、古墳時代の堅穴住居跡5棟、土塙1基、奈良時代の堅穴住居跡4棟、上塙2基、その他に掘立柱建物跡が4棟検出された。また、ローム層中から黒磚石剥片2点が出土し、周辺に旧石器時代の遺構の存在が期待される。(福岡市埋蔵文化財調査報告書第128集)

第3次調査(寿町2丁目4-12、1986年12月15日～1987年3月31日)

第2次調査の東に隣接して行なわれた調査である。古墳時代の堅穴住居跡2棟、奈良時代の堅穴住居跡4棟、土塙4基、その他に掘立柱建物跡4棟が検出された。(福岡市埋蔵文化財調査報告書第181集)

(4) 第4次調査地点の現況

第4次調査地点は、南八幡遺跡群のほぼ中央に位置する。現況は、ほぼ平坦な宅地である。これを昭和10年頃の地図によってみると、旧地形は調査地点付近から西に傾斜はじめる様子がみられ、本調査地点は丘陵頂部をやや下った、西側傾斜面の落ち際にあたると見える。

本調査地点は、昭和28年まで福岡県立筑紫高等女学校の敷地内であった。地図によると、運動場部分にあたるようである。また、地図にはあらわれていないが、地元の人の話によると、女学校脇には林が残り、高さ1m程の崖となっていたとの事で、昭和初年にはすでに大規模な削平がなされていたのであろう。高等学校は昭和28年失火により移転し、宅地にかわる。



Fig. 4 第4次調査地点位置図(昭和10年頃、1/10,000)

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要と経過

前章で述べた経緯を経て、1991年5月23日表土剥ぎを開始、発掘調査に着手した。表土剥ぎは、重機によって調査予定部分の東辺よりはじめた。表土はバラスで、バラス下にはうすく赤土による整地がなされていた。赤土による整地層の直下は、鳥栖ローム層であり、遺構がみとめられた。表土から遺構検出面までの深さは20cm前後で、ローム面そのものも削平を受け、低くならされたものと判断できた。

鳥栖ローム面は、調査区東辺から10m程で急激に深く落ちこみ、その落差は1m以上におよんだ。これから西側では、地山は深い掘削を受け遺構はみとめられず、試掘結果通りに、申請地の東側3分の1について、調査を実施した。

遺構の遺存状態は、大規模な削平のためにきわめて悪く、ほとんどが浅く残っているのみであった。検出した遺構は、竪穴住居状遺構・柱穴である。遺物は、土器の細片が数点出土した。6月14日埋め戻し、15日に調査器材を撤収し、発掘調査を終了した。

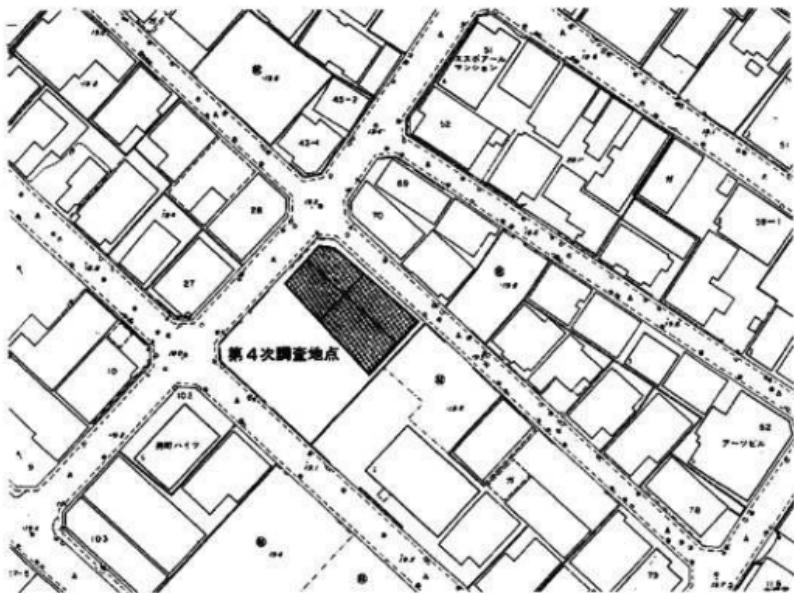


Fig. 5 調査地点位置図 (1/1,000)

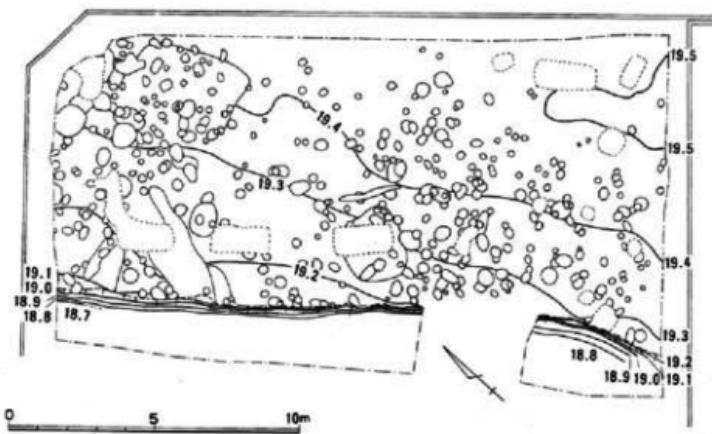


Fig. 6 第4次調査地点地形測量図 (1/200)



Fig. 7 造構全景 (南より)

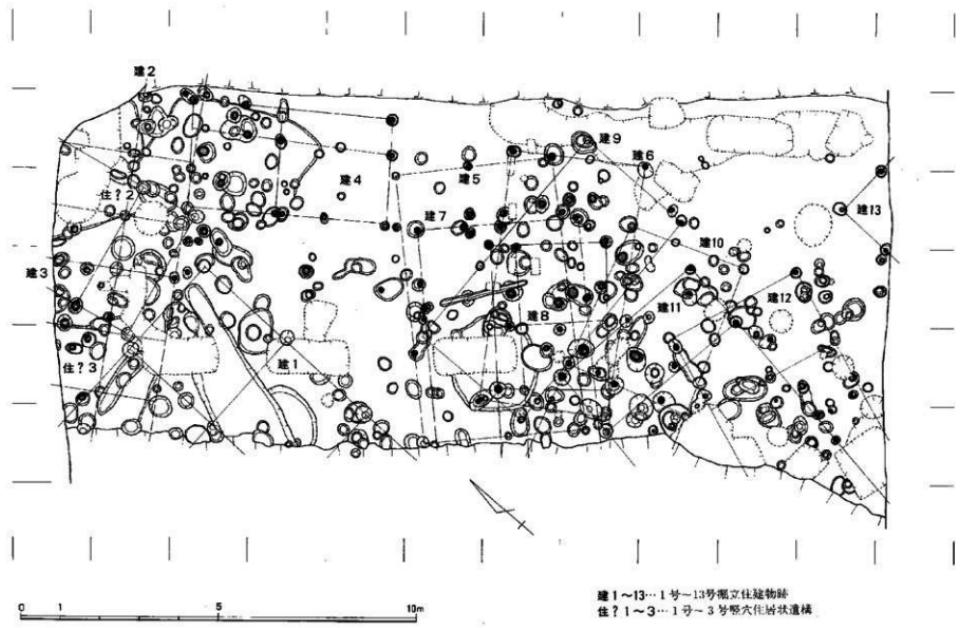


Fig. 8 遺構全件実測図 (1/100)

2. 遺構

(1) 壺穴住居状遺構

本調査地点は、前述の通り削平が著しく、明らかに壺穴住居跡と判断できる遺構は、検出できなかった。ここで壺穴住居状遺構としたのは、遺構を検出するため地山面を清掃・精査した過程で確認できた、壺穴住居跡の残存と考えられるきわめて浅い落ちこみである。地山の削平が、旧地形を反映してか、南西に向って緩く傾斜しているため、壺穴住居状遺構の壁の立ち上りは、北東側ではわずかに残るもの、南西側では失われ、遺構本来の形態・規模ははっきりしない。また、これに伴うと考えられる主柱穴も特定できず、壺穴住居跡とするには難が残る。よって、壺穴住居状遺構として、壺穴住居跡の可能性を示し、報告するものである。

1号壺穴住居状遺構 (Fig. 9, Fig. 11-(1))

「コ」字形にわずかに傾きをとどめるもので、規模を推定できる唯一の例である。北壁は、その西端でゆるく南へ曲っており、ここを北西隅とすれば、 $4 \times 3\text{ m}$ 程の長方形のプランが復原できる。

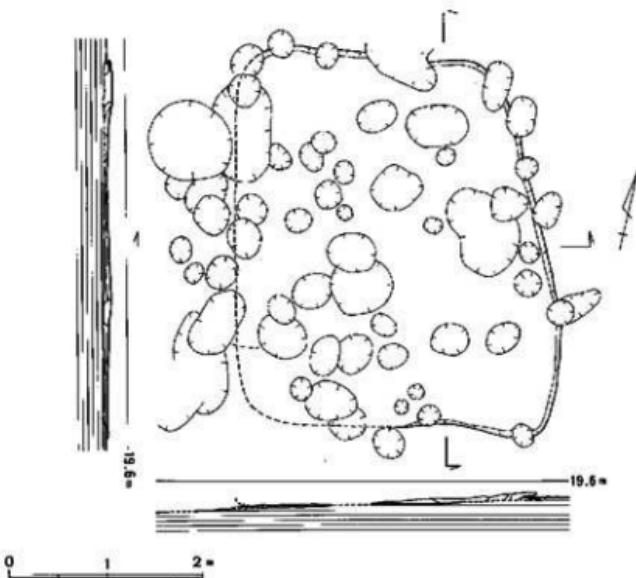


Fig. 9 1号壺穴住居状遺構実測図 (1/60)

2号竪穴住居状遺構 (Fig. 10, Fig. 11-(2))

1号竪穴住居状遺構と一部重複して検出された遺構である。2辺が残る。南東辺は、北端でゆるく弧を描いて調査区外に出ており、これを隅とすれば、南東壁2.9m、南西壁3m以上方の長方形を呈すると考えられる。1号竪穴住居状遺構に切られる。

3号竪穴住居状遺構 (Fig. 10)

北東壁の一部が検出されたのみで、規模は不明。おそらく方形を呈するものであろう。

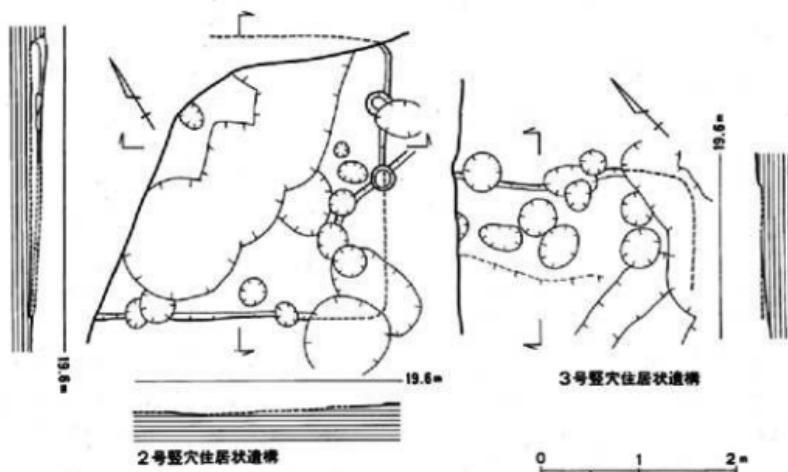


Fig. 10 2号・3号竪穴住居状遺構実測図 (1/60)

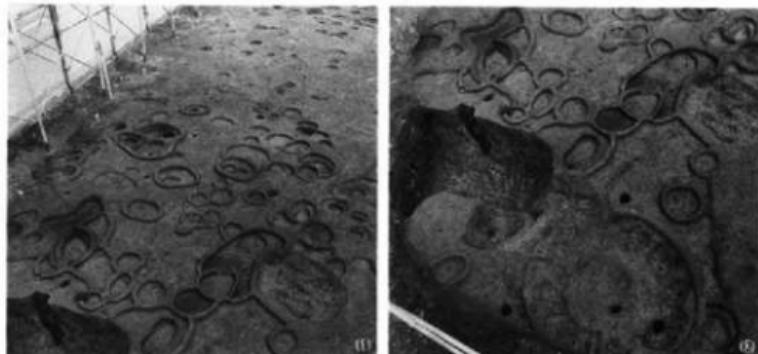


Fig. 11 竪穴住居遺構 (1)…1号 (北より)、(2)…2号 (北西より)

(2) 堀立柱建物跡

第4次調査地点からは、遺存状態こそ悪いものの、ほぼ全面にわたって多数の柱穴が検出された。すべて堀立柱建物跡の柱穴と考えられ、柵列を想定させるものはなかった。柱穴は、礎石・礎板等を伴わず、その痕跡もみとめられなかった。比較的多くの柱穴において、柱痕跡がみとめられた。以下、これらの柱穴から想定された堀立柱建物跡について述べるが、1号堀立柱建物を除いて、調査終了後実測図上で推定復原したものであり、その当否を含めてまだ多数の建物の存在が考えうることを、断っておきたい。

1号堀立柱建物跡 (Fig. 12)

調査中に確認できた唯一の建物跡である。柱穴は、他の柱穴と比べて格段に深く、地山の削平を考慮すれば、本来は深さ1mを優に越えたであろう。本調査区内では、1×2間分を調査しているが、柱間寸法を延長すると、さらに南と西にのびる可能性が考えられる。ほぼ磁北と一致した方位を取る建物である。

2号堀立柱建物跡 (Fig. 12)

ほとんどが調査区外に出ており、規模を確定できない。一応、桁行で5間以上、梁間で2間以上を想定している。桁行は、磁北から58度東偏する。

3号堀立柱建物跡 (Fig. 13)

梁間2間、桁行2間以上に復原できる建物跡である。桁行は、磁北から約11度ほど西に振れている。

4号堀立柱建物跡 (Fig. 14)

調査区内で、一応1間×2間の1面に底をつけたプランとして復原した。底とした側は、まもなく調査区が切れており、さらに区外にのびる可能性も考えられるが、復原の通り底を付設したものとすれば、底を越えてさらに延びる可能性は低いと言える。身舎の南側の桁行で、磁北から37度西偏する。

5号堀立柱建物跡 (Fig. 13)

梁間2間、桁行3間以上の建物跡である。桁行は、磁北から41.5度東偏する。

6号堀立柱建物跡 (Fig. 14)

桁行3間分を検出しているが、柱間寸法からみて、さらに両側にのびる可能性はある。梁間1間だが、桁行1間にに対し、1間半分の柱間寸法を持つ。桁行は、磁北から56度東偏する。

7号堀立柱建物跡 (Fig. 15)

梁間1間、桁行2間を検出しているが、桁行は西南方向の調査区外にのびるものと考えられる。梁間の1間は、桁行の1間にに対し2間分の柱間をとる。桁行の方向は、磁北から43度東偏する。

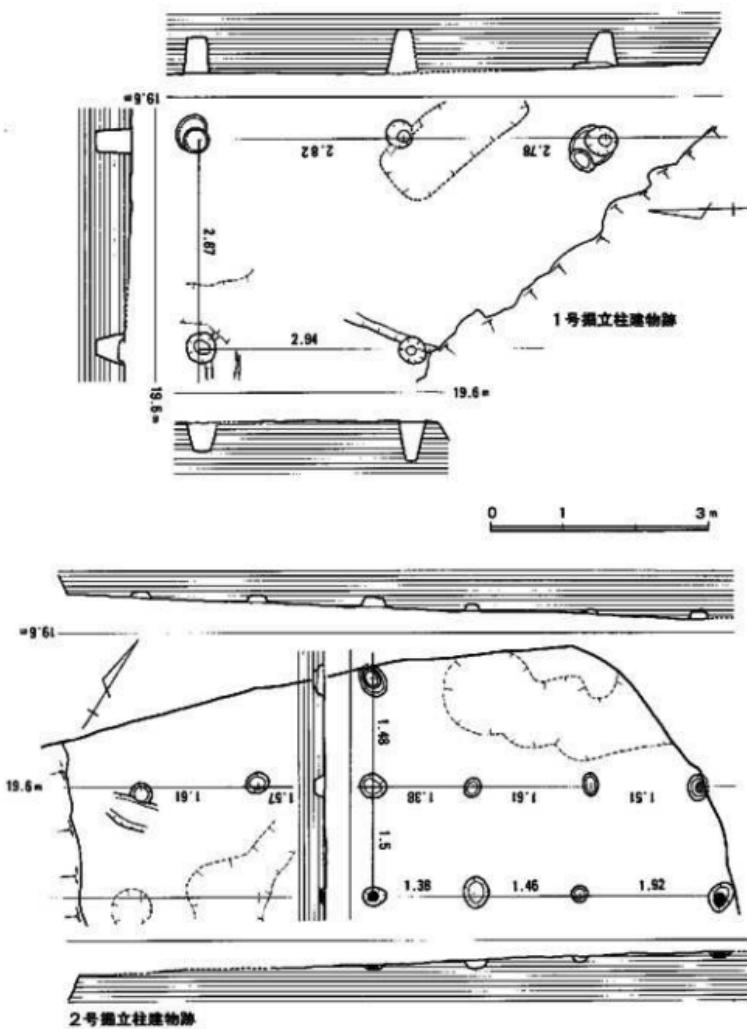


Fig. 12 挖立柱建筑物跡実測図① (1/80)

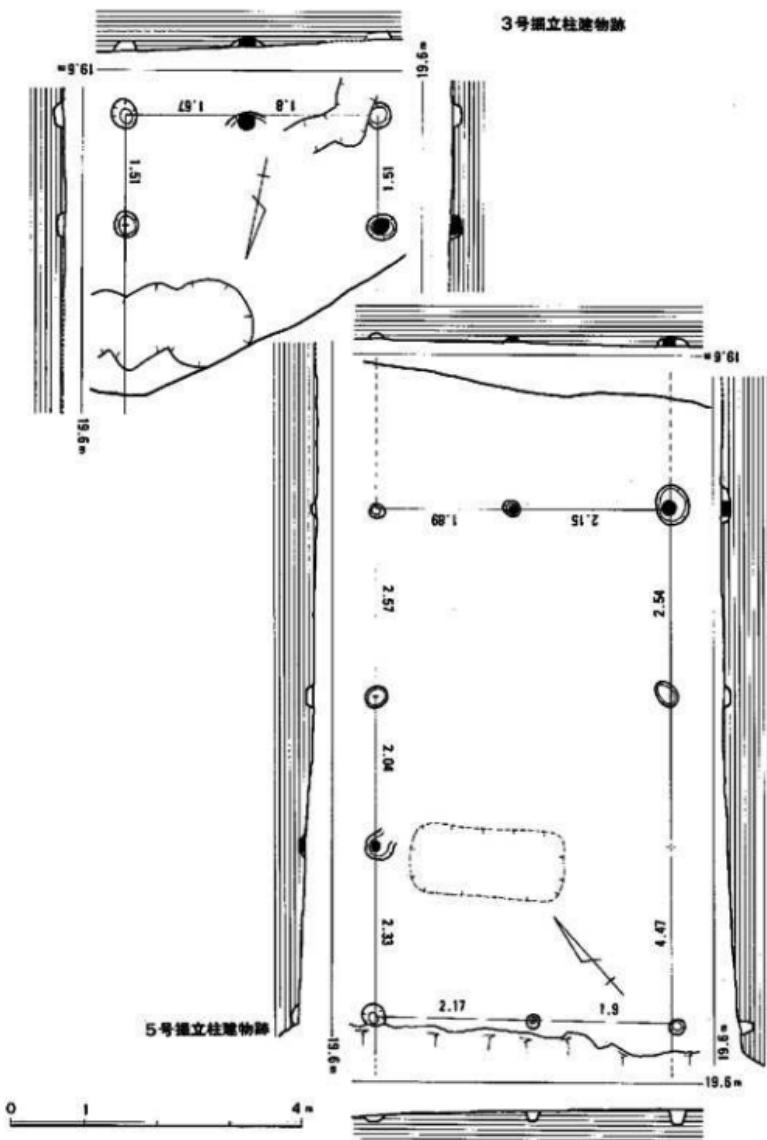


Fig. 13 振立柱建物跡実測図② (1/80)

8号掘立柱建物跡 (Fig. 15)

梁間1間、桁行2間分を検出している。西北の桁には、底もしくは縁がつく。桁行は、さらに南西方向にのびるものと思われる。東の妻側に、南東の桁の並びで半間程離れて柱穴がみられるが、本建物跡との関連は明らかではない。桁行は、磁北から48度東偏する。

9号掘立柱建物跡 (Fig. 16)

1間×2間の建物跡である。桁行は磁北から87度東偏し、ほぼ東西棟と言える。

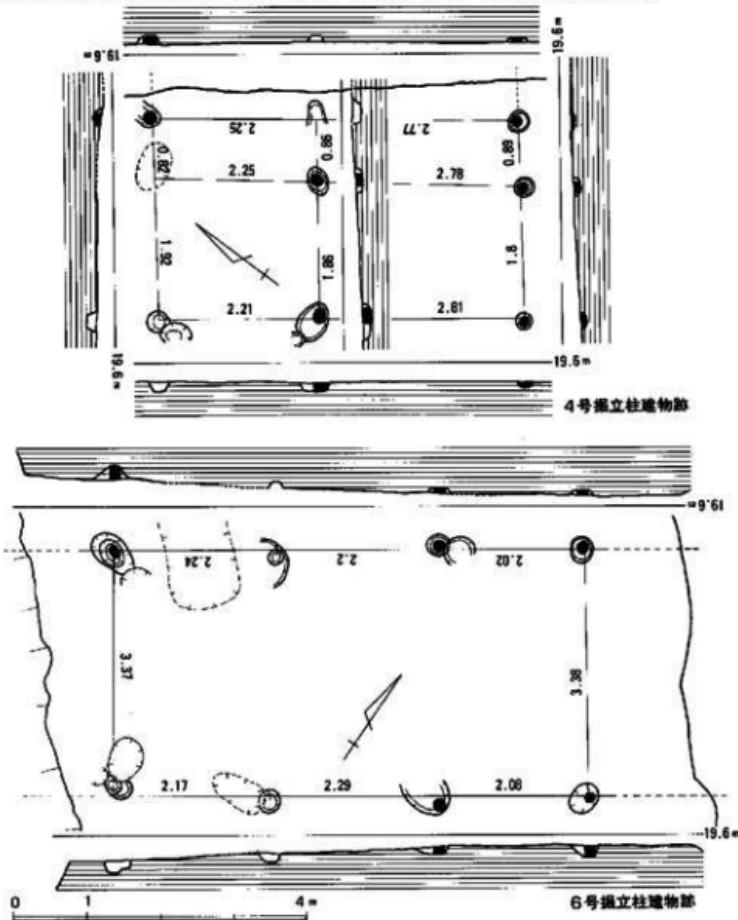
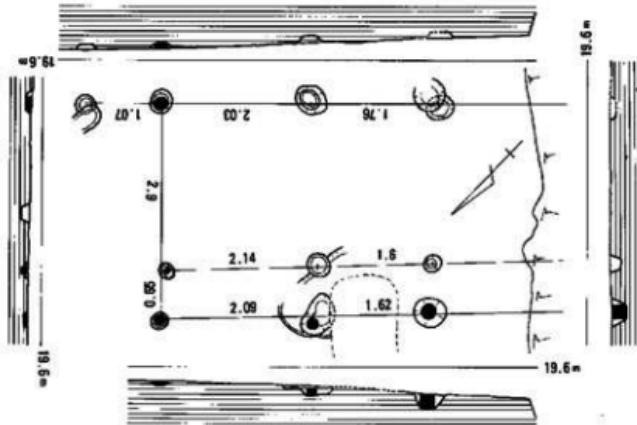
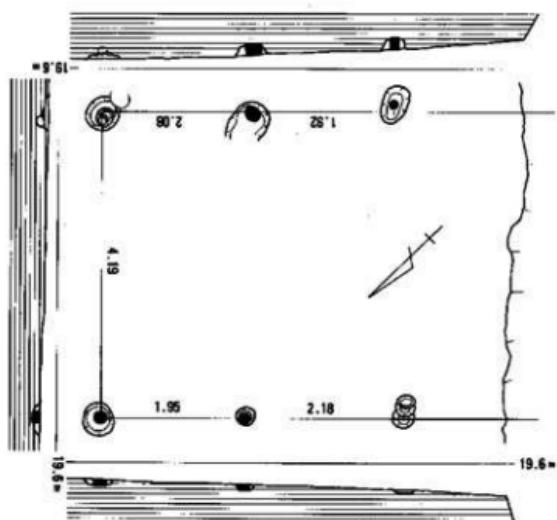


Fig. 14 掘立柱建物跡③ (1/80)



0 1 4 m

Fig. 15 掘立柱建物跡④ (1/80)

10号掘立柱建物跡 (Fig. 16)

梁間2間、桁行3間以上の建物跡である。梁間の2間は、桁行の柱間1間にに対して、ほぼ同じ柱間の1間分と、約半間分とにわかれる。桁行は、磁北から約72度東偏している。

11号掘立柱建物跡 (Fig. 17)

梁間2間、桁行3間を検出した。桁行は、さらに南側調査区外にのびる可能性がある。桁行は、磁北から8度東偏し、ほぼ真北に近い方位を取る。

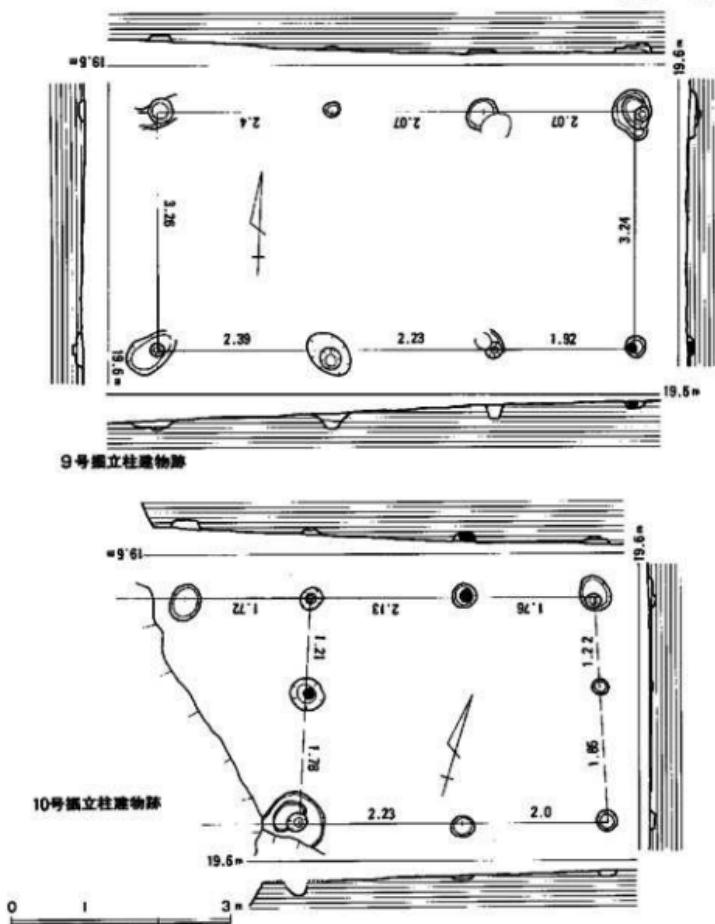


Fig. 16 据立柱建筑物跡実測図⑤ (1/80)

12号掘立柱建物跡 (Fig. 17)

調査区内で 1×2 間分を検出した。南西隅の柱穴は、擾乱の為、失われている。さらに、南側の調査区外にのびる可能性がある。磁北から20度東偏する。

13号掘立柱建物跡 (Fig. 17)

1×1 間分を検出しているが、調査区外にのびることはほぼ間違いない、建物の北西隅を調査したものであろう。磁北から2度東偏する。

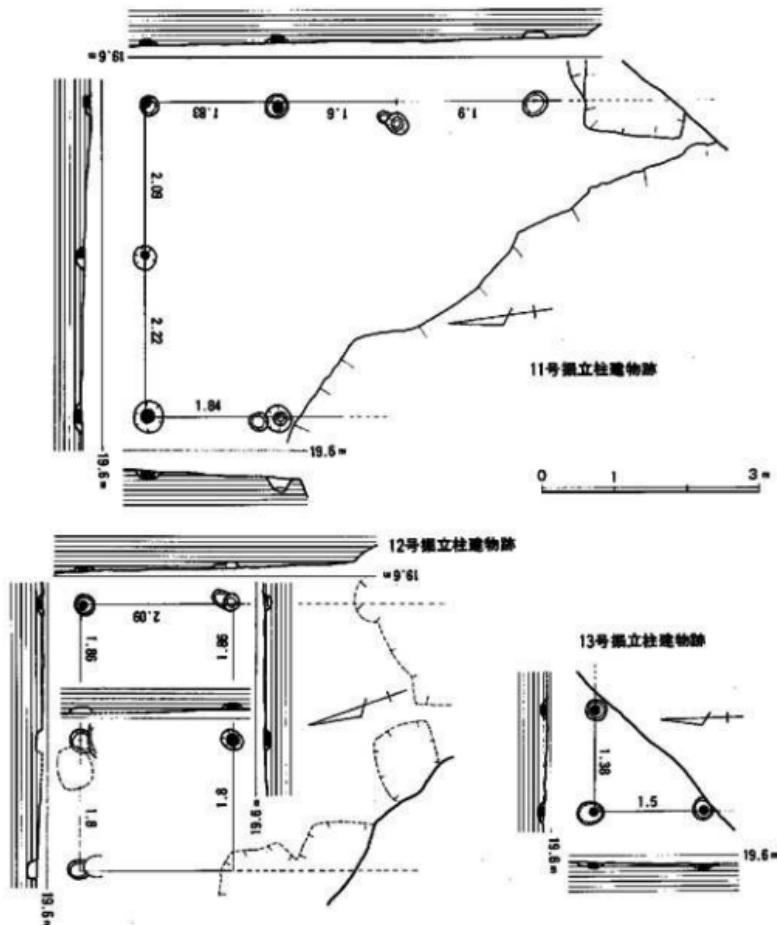


Fig. 17 掘立柱建物跡実測図⑤ (1/80)

第三章 まとめ

本調査では、遺物は土器の細片が少量みられたのみで、遺構の時期を示す要素は全くない。そのため、時期比定は困難であるが、遺構の切り合い関係等から変遷過程を推測し、まとめとしたい。

まず、本調査で最も古い時期の遺構は、堅穴住居状遺構である。柱穴は、すべてこれら堅穴住居状遺構を切り込んで掘られており、掘立柱建物跡が後出することを示している。これらの堅穴住居状遺構を堅穴住居址として、南へ150m程離れた南八幡遺跡群第2次・第3次調査と比較してみると、第2次・第3次調査からは、6世紀後半から7世紀初頭にかけての堅穴住居址と8世紀後半のものとが調査されている。この両時期の堅穴住居址をみると、前者は検出面からの深さ20~30cm、主柱を4本持つものが主体である。後者は、深さ40~70cmと深く、主柱穴を持たない。両者は主軸方位の上でも異なる傾向をみせるがバラつきもあり、150m近く離れた

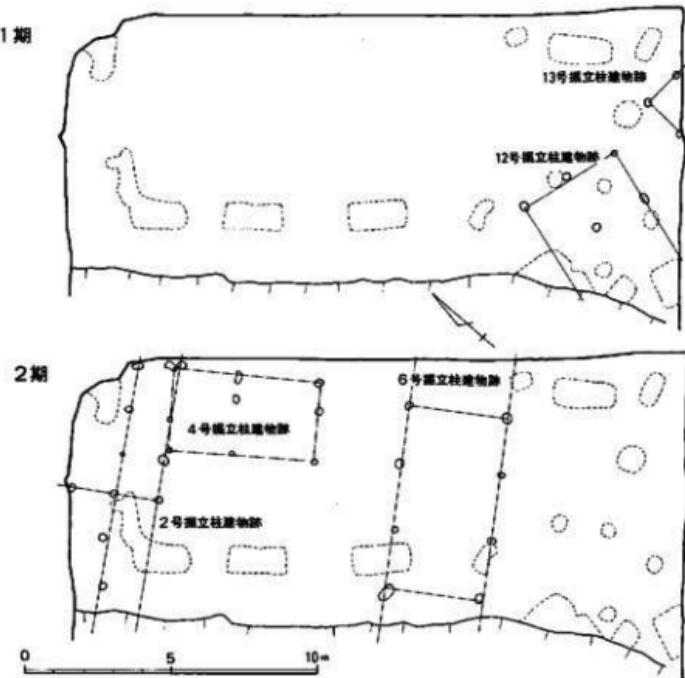


Fig. 18 掘立柱建物跡変遷図① (1/200)

今回の調査地点にあてはめるのには、無理があろう。本調査の堅穴住居状遺構は、いずれも主柱穴を認定できず、大がかりな削平にもかかわらず、わずかとは言え壁を検出することができた。この主柱を持たず、壁の深さが深いことを共通項としてみれば、8世紀後半の堅穴住居跡を該当させることができよう。

次に、掘立柱建物跡についてみたい。これについては、柱穴の埋土、柱穴の切り合い関係、建物の方向性を手がかりとして、変遷を組み立てる。柱穴の埋土には、大きく3種類がまとめられた。Aは、黒色土で、比較的しまっていない。Bは暗褐色粘質土で、かたくしまっている。Cは、灰褐色粘質土である。なお、それぞれ中間的なものもみられる。これらは、柱穴の切り合い関係から、C-B-Aと新しくなることが知られる。Aの建物跡は、1号・3号・5号・7号・9号・11号、Bは6号・8号・12号・13号、Cの建物跡は復原できていない。

次に柱穴の切り合いをみると、4号-3号、6号-8号、7号-5号、8号-9号、8号-10号、12号-11号の前後関係が確認できる。また、1号～3号、2号～4号、4号・5号・7

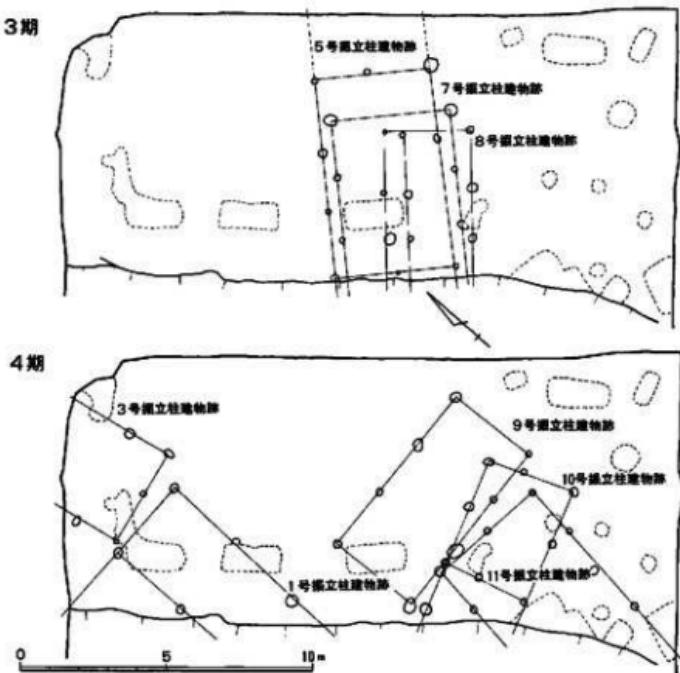


Fig. 19 掘立柱建物跡変遷図② (1/200)

号、5号～11号、10号～12号は、重複もしくは近接しすぎており、同時には存在しない。

次に建物方位の近いものをまとめると、第1群－1号・3号・9号～11号、第2群－2号・4号・6号、第3群－5号・7号・8号、第4群－12号・13号となる。

これらをまとめると、第1群は埋土Aの柱穴より構成され、最も新しい段階におかれる。また1号と9号は主軸が直交し規則性がみられ、建物相互の間隔もあいているので、同時存在の可能性が高い。3号と10号は、それぞれ1号と9号に近接し、同時にはありえず、これに先行または後出するものである。第2群は、6号が埋土Bの建物である。2号と4号は重複し、同時には存在しない。4号と6号は主軸が直交し、同時存在の可能性がある。第3群は、5号・7号が埋土A、8号が埋土Bである。これらは重複し、かつ方向性が近似するので建て替えを想定でき、埋土の新旧関係と柱穴の切り合い関係から8号～7号～5号の変遷が考えられる。第4群は、埋土Bの建物群で、最も古い段階におかれる。これらの点から、第3群の建て替え過程に埋土Bから埋土Aへの変化を認め、第4群（12号・13号）—第2群（4号～6号、2号）—第3群（8号～7号～5号）—第1群（1号～9号、3号・10号・11号）の4期、建て替えと同時存在を考慮して8～11回の変遷が想定できる。これらの建物群に時期比定を行なうのは、先述の通り困難である。ここでは、1号掘立柱建物跡の柱穴を除いたすべての柱穴が小さく、柱痕も細いという点から、古代後半以降の建物である可能性を考えるにとどめておく。

南八幡遺跡群は、近代以後の地形改変が著しく、遺跡の残りが悪い地域である。今回の調査は、時期比定の決め手となる遺物を欠き、必ずしも満足の行く成果は得られなかつたが、かかる南八幡遺跡群の解明に向けては、貴重な資料を提供したものと信じるところである。



Fig. 20 調査に参加した方々

南八幡遺跡 2

—南八幡遺跡群第4次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第277集

1992年3月13日発行

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 慶和印刷株式会社

福岡市博多区東那珂1-15-1
